

公共図書館におけるマンガに対する論点の変遷

小野田 優里

日本ではマンガは古い歴史を持つ文化であるが、マンガの収集に対して積極的な公共図書館は少数派であるといえる。図書館とマンガに関する論文の中で、図書館におけるマンガの論点の変遷に対して主眼が置かれた研究はない。本研究では公共図書館におけるマンガに対する論点の変遷について明らかにすることを目的とする。また、公共図書館のマンガ是非論に影響を与えうる文化的背景・組織・機関として、社会・文部科学省・図書館の3点の側面から、マンガ議論について調査を行った。

本研究の調査方法は文献調査を用いた。調査対象期間は1950年1月から2019年11月までである。調査対象は、公共図書館関係の論文、『図書館年鑑』、『年報 こどもの図書館』、『文部時報』、『文部科学時報』、『文部科学広報』、新聞データベースである。

社会においては、マンガは常に批判の対象となっていた。しかし、1950年代から2010年代まで、批判対象はマンガ全体から個々の作品へと変化していた。また、社会全体としてマンガに対して好意的な意見がみられるようになったが、行政主体のマンガの保存に関しては理解を得られない事例もあり、マンガアーカイブの設立には課題が示されていた。

文部省・文部科学省は1990年代に入るまでマンガに対してほとんど見解を示さなかった。悪書追放運動などが活発であった時期でも文部省はマンガについては公式な意見を出していなかったため、図書館のマンガ是非論に影響を与えたとは考えにくい。1990年代からメディア芸術の一つとして、文化庁がマンガ振興の支援を開始したが、こうした動向は図書館に対して影響を与えるものではなかった。

図書館においてはマンガが批判されている時期であっても、マンガを収集する館が一定数存在していた。また、マンガ収集の方法論は1980年代までには確立されていた。一方で、図書館資料論の立場からマンガの位置付けは明確に定められておらず、収集、整理、保存については各館の判断によるところが大きいことが明らかとなった。

本研究では、1950年代から2010年代までのマンガに関する議論について3つに時代区分した。1950年代から1960年代まではマンガは子供向けであり、教育的悪影響について批判された「マンガ批判期」である。1970年代から1990年代はマンガの読者対象が青少年から大人に広がったが、マンガの受入には賛否両論のあった「マンガ賛否両論期」である。2000年代から2010年代までは、図書館や自治体でマンガが受け入れられてきた「マンガ受容期」である。1950年代から2010年代の間に、マンガに対する社会認識が大きく変化している一方で、公共図書館においてはその受入の理念については大きな変化は見られない。マンガの受入方法に関しては課題点も多くあるため、検討と業務の整備が必要である。

(指導教員 吉田右子)